

大東急記念文庫本『きのふはけふの物語』における「下」の語をめぐる

漆 崎 正 人

一 はじめに

咄本『きのふはけふの物語』（1615～24年頃成立）は、伝本により、所収話に差異がかなりあることが知られており、また共通話においても、表記・表現に違いが少なからず見られる。

『きのふはけふの物語』の諸伝本のうち、古活字十一行本の大東急記念文庫本『きのふはけふの物語』（以下「大東急記念文庫本」と呼ぶ）は、上下揃った古活字本として最も古いと思われる、しかも流布本系統の祖であることから、日本古典文学大系『江戸笑話集』（岩波書店・一九六六年刊）所収の『きのふはけふの物語』（以下「江戸笑話集本」と呼ぶ）の底本に採用され、また北原保雄編『きのふはけふの物語研究及び総索引』（笠間書院・一九七三年刊）（以下「北原保雄編本」と呼ぶ）ともなっている。

「大東急記念文庫本」は、漢字かな交り文で記されているが、用いられている漢字には宛字もあり、振りがなは少なく、かなは殆ど濁点（及び半濁点）が付されていないので、語の特定が厄介な場合もある。

例えば、上巻第21話に、「此鳥のけをまくらに入候へはつふうのくすりちやと申ほとに」という表現があるが、この「つふう」を「江戸笑話集本」では、「通風」（五六ページ）と翻字し、頭注で「痛風。関節やその周囲の組織に急性または慢性の炎症を起し、痛み、腫れ、赤くなる病。」と説明している。寛永整版八行本『きのふはけふの物語』を底本とする武藤禎夫訳『昨日は今日の物語』（平凡社・一九六七年刊）（以下「武藤禎夫訳本」と呼ぶ）でも「通風」（二四ページ）と現代語訳している。一方、「北原保雄編本」の索引篇では、「つふう（頭痛）」の用例として扱われているし、無刊記整版八行本『きのふはけふの物語』を底本とする宮尾與男訳注『きのふはけふの物語全訳注』（講談社・二〇一六年刊）（以下「宮尾與男訳注本」と呼ぶ）では、「つふう」（六四ページ）と翻字し、語注で「『つふう』は頭痛。頭痛。」と説明し、現代語訳で「頭痛（六五ページ）」と訳している。主要な国語大辞典・古語大辞典での扱いを見ると、『日本国語大辞典（第二版）』（小学館・二〇〇〇二年刊）（以下「日国」と呼ぶ）では、『きのふはけふの物語』の当該例のみを用例として挙げる、「頭痛」の意義の「つふう（頭痛）」の項目があり、同時に「頭痛」の意義の

「つふう（頭風）」の項目が、平安時代から江戸時代までに成立したいくつかの文献からの用例を掲げて立項されているが、『小学館古語大辞典』（小学館・一九八三年刊）（以下『小学館』と呼ぶ）、『角川古語大辞典』（角川書店・一九八二・一九九九年刊）（以下『角川』と呼ぶ）、『時代別国語大辞典 室町時代編』（三省堂・一九八五～二〇〇一年刊）（以下『時代別』と呼ぶ）では、いずれも「つふう（頭風）」の項目を立て、古典文献からそれぞれ数例を挙げているものの、「つふう（痛風）」の立項はない。しかも、『時代別』の「つふう」の項目では、『日国』とは逆に『きのふはけふの物語』の「つふう」をも挙例されている。「つふう（痛風）」の確実な用例は見出したい。『戲言養氣集』（1615年頃成立）にはこの類話があるが、ほぼ同じ文脈で「つふう（頭風）」の類義語の「頭痛」が使われている。そもそも、登場人物の出任せの口実だからとはいえ、頭部に関わる病気ならともかく、関節痛に枕の効能を説くということは極めて理解しにくい。当該の「つふう」は、「つふう（頭風）」と解するのが適切である。『日国』は、「江戸笑話集本」を出典としているために、「つふう（痛風）」という幻の語を立項してしまったことになる。

そこで、本稿では、「大東急記念文庫本」に存する「下々」（この表記形式は当該本で弧例）について、振りがなを伴わない漢字表記の語の特定のケースとして、検討を試みることにする。なお、「下々」の存する説話は巻頭話で、諸本に共通して採用されている

る説話である。

二 「大東急記念文庫本」の巻頭話と、「下々」の諸本との校異

二・一 「大東急記念文庫本」の巻頭話

「大東急記念文庫本」の巻頭話の本文は、『大東急記念文庫善本叢刊6』（汲古書院・一九七六年刊）の『きのふはけふの物語』に基づく。

一 むかし天下をおさめ給ふ人の御内にはうちやくなるものともあつてきん中へ参ちんにとらうといひてやりの石つきをもつて御門をたゞく御つほねたち出あひ給ひて是はたいりさまとて下々のたやすくまいる所にてはないそはやく／＼いかたへもまいれとおほせければ此家をちんにとらせぬといふりくつのあらはていしゆまかり出てきつとことほりを申せといふた

二・二 「大東急記念文庫本」巻頭話の「下々」の諸本との校異

ここで校異に用いる諸本は、影印本、及び原文を忠実に翻刻し

たと思しい翻刻本に限定する。すなわち、「神宮文庫本」(古活字版十行本)、「横山重氏蔵本」(寛永十三年整版九行本)——以上『近世文芸資料1』(古典文庫・一九五四年刊)所収、「天理図書館古活字版十行本」、「古活字版八行本」(刈谷市立図書館蔵(上巻)・天理図書館蔵(下巻))、「加賀文庫本」(寛永十三年整版九行本)、「学習院大学本」(写本)——以上『嘶本大系』第一卷(東京堂出版・一九七五年刊)——「大英図書館本」(古活字十行本)、『勉誠社文庫81』勉誠社・一九八八年刊)、「宮尾與男訳注本」である。

「神宮文庫本」……………下々
 「横山重氏蔵本」……………げゞ
 「天理図書館古活字版十行本」……………下々
 「古活字版八行本」……………下々
 「加賀文庫本」……………けゞ
 「学習院大学本」……………下々
 「大英図書館本」……………下々
 「宮尾與男訳注本」……………げ、
 これらの諸本の表記を、表記を基に整理すると、次のようになる。

- ①下々 「神宮文庫本」「天理図書館古活字十行本」「古活字版八行本」「学習院大学本」
 ②下々 「大英図書館本」
 ③げゞ 「横山重氏蔵本」「加賀文庫本」

④げ、 「宮尾與男訳注本」

①は、漢字「下」の下に、漢字一字の繰り返しを表わす「二の字点」を伴う表記形式であるが、「大東急記念文庫本」を含め、多く見られる。②は、漢字「下」の下に、通常二字以上の仮名を繰り返す時に用いる「くの字点」を伴っている。この「くの字点」は、「二の字点」と同じ働きなのか、あるいは、「下」の読みが仮名二字相当との意図で用いられているのか、判断がつかぬ。③は、平仮名「げ」の下に、繰り返されるところの平仮名が濁音であることを表わす濁点付きの「一っ点」が使用されている。④は、平仮名「げ」の下に、「一っ点」が使われている。③と④とは、一見別語を表わしているようでもあるが、濁点の採否には一つの文献内においてすら揺れがあるもので、③、④はともに、「げげ」を表わしていると見做すべきである。すなわち、これらの表記から考えられる語形は、①、②は、「げげ」、「じじたじた」、「じもじも」(「かか」という語形は未見)の可能性があり、③、④は、「げげ」に絞られるということになる。

三 「大東急記念文庫本」の「下々」の検討

三・一 当該の「下々」や諸本で対応する箇所に関する先行の見解

まず、「江戸笑話集本」では、当該の「下々」の読みの特定はしていないものの、「たいりさまとて下々のたやすくまいる所にはないぞ」に頭注を施し、「天子の御住居である宮殿で、下々の者が気やすく来る所ではない。」という訳を与えており、「下々の部分を「下々の者」と解している。

次に、「北原保雄編本」では、その「索引篇」によれば、当該の「下々」を「したじた」と認定している。実は、「大東急記念文庫本」には、上巻の第六五話に、仮名書きの「したく」の例があり、恐らくそれを根拠としていると思われる。

一 をはりのなこ屋へ西国より大名衆御見まひとし
て御くたりの時さまくの御ちそう中くこん
語にのへかたしたくをは町中よりしたし
に仕れとてこんたてをいたさるゝ

一 本せんは にんしんしる

一 なます ふななととてさまくへ也

まち人ともこれをみていつれもとゝのへ申
へきかゝやうに大せひの事ににんしんを十
きんや丹きんではなるまひいかやうにも此儀御
わひこと申さんとて御奉行衆へせうき申けれ
はふきやう衆わらひたまひてせうきこしめし
わけられたりさあらは大こんしるにて御ゆるし
なさるゝそと仰せければよく御せう申たる物

哉そうして此殿さまほと御しひふかき事は

てんかに又もあるまいとてよろこひけるとそ

この「したく」については、「江戸笑話集本」では、「下々」と
翻字し、「したくをは」に対して頭注を立て、「大名の下々のお
供たちへの馳走。」と訳していて、注では、ともに「下々」で訳
出しており、当該の「下々」との違いはないようにも見えるけれ
ども、第六五話の「したく」は、(大名配下の)家来たち」と
いう意味になり、文脈的な意味は異なっていると思われるので、
この「したく」の例をもって、ただちに当該の「下々」を「し
たじた」と特定するのは早計である。ちなみに、この第六五話と
同じ説話を有する別本では、「横山重氏蔵本」の本文は「下々」、
「宮尾與男訳注本」の本文は「下々」、「宮尾與男訳注本」の訳は
「大名の下々のお供たち」、「武藤禎夫訳本」の訳は「大名のお供
たち」となっている。

次に、「宮尾與男訳注本」では、本文の「げ」に語注を加え、
「『げ』は下々。身分の低い者たち。」と説明し、現代語訳では
「下々の者」と訳し、「江戸笑話本」と同じ解釈を示している。

次に、「武藤禎夫訳本」では、「下々の者」という訳で、これも
「江戸笑話集」と同様の解釈をしている。

したがって、当該の「下々」に関わる、先行の見解を踏まえると、
「下々」の語形は、「したじた」あるいは「げげ」であって、意味
は、(身分の低い、下々の者)ということになる。

三・二 主要な国語大辞典・古語大辞典での「下々」相当項目

『日国』には、「げげ」、「したじた」、「しもじも」の項目がある。
 げーげ【下下】『名』①しもじもの人。身分の低い人たち。

しもじも。*名語記(1275)五「下々といふ義歟」*日
 葡辞書(1603-04)「Guegue(ゲゲ)〈訳〉公卿以外のす
 べての人々」*滑稽本・八笑人(1820-40)五・中「今お
 めへの双(なら)べた一一の所は、いづれも下々(ゲゲ)
 の者の這入る所だから」②ひじように劣っていること。最
 下等のもの。下等の下等。下の下。↑上上(じようじょ
 う)。*狂歌・吾吟我集(1649)三「うつくしきむくげの
 花にくらべては下々(ゲゲ)とや見まし色もなき草」*地
 方凡例録(1794)二「扱士の位上々と下々は人力にて如
 何とも仕難し」*俳諧・七番日記—文化一〇年(1813)
 一〇月「下々も下々下々の下国の涼しさよ」*文明開化
 (1873-74)〈加藤祐一〉初・上「あたまをむき出しにして
 おくは、世界中の下下(ゲゲ)の下国の人のする事で、開
 化の国には決してない事でゐる」③(しもじものはく履物
 の意から)わらぞうり。金剛ぞうり。*平家(13C前)九・
 二度之懸「馬にもものらずけけをはき、弓杖をついて」*名
 語記(1275)五「下臈のはき物にげげ、如何。げきとい

ふをけけといひなせる也」*日葡辞書(1603-04)「Guegue
 (ゲゲヲ)ハク」*俳諧・毛吹草(1638)六「下下の足も
 土をふまぬや雪の道〈正章〉」④下郎。下僕。ぞうり取り。
 *随筆・嬉遊笑覧(1830)二・中「僕人を契俄(ゲゲ)
 とあるは九州あたりにて草履取をしかいひしを伝へて書る
 べし」(以下略)

したじた【下下】『名』①身分の卑しい人たち。下層階級
 の人々。また、官に属する身分の高い人々に対して、一般
 の人々。庶民。しもじも。したかた。↓うえうえ。*玉塵
 抄(1563)四「下情はいやしい者したしたの者の心と云
 ことぞ」*天草本平家(1592)三・三「xitajitiano(シ
 タジタノ)モノ ドモガ ヘンド ナドデ トキドキ
 リドリヲ シタレバトテ」*思出の記(1900-01)〈徳富
 蘆花〉一・五「尤も是迄勉強せい、下賤(シタジタ)の小
 供と一所に遊ぶな、などと折々叱られたことがあったの
 で」②部下の人々。召使い。奉公人。下人。しもじも。
 *天草版金句集(1593)「xitajitana(シタジタワ)シュ
 ジンノ スキコノム コトラ マナブ モノヂヤ」*仮名
 草子・恨の介(1609-17頃)上「秀次を始め奉り、三十
 余人の女房たちを始めとして、御したじた面々も、天正の
 春の花、文祿の秋の紅葉とて、散々にこそなり給ふ」*評
 判記・色道大鏡(1678)一四「其家へ不断出入をしつけ、

下々（シタじた）までに心をくぼり、へつらひを本とす」
 ＊浮世草子・好色五人女（1686）一・三「こなたには女酒盛、男としては清十郎ばかり、下々天目吞に思ひ出申て、〈略〉前後もしらず有ける」③（形動）劣っていること。下位であること。また、そのさま。＊日葡辞書（1603-04）「Xitjiani（シタジタニ）ナル〈訳〉位、身分などが低くなる」（以下略）

しも・しも【下下】『名』地位や身分などの低い人々。下層の人々。一般庶民。また、その社会。しもさま。すえずえ。したじた。↑うえうえ。＊玉麈抄（1563）一二「位にある人たちの、物をむさぶり、欲心ふかうして、年貢ふしんをゆえもなうましてとるほどに、下（しも）々にわざわざいのでくるぞ」＊わらんべ草（1660）四「下々のもののほむるは、みみおどろく事ありて誠ならず」＊狂言記・瓜盗人（1700）「惣じて下々は、どれも此様なことじや」＊浄瑠璃・津国女夫池（1722）二「小袖の縫は將軍の御物好、俗にいふ室町模様、下々の着る小袖にあらずと」（以下略）『小学館』には、「ゲゲ」、「したじた」の項目が存する。

げーげ【下下】『名』①しもじもの人。下賤の者。「いかに日本人、——の身として玉体へ近づく事機らはしうおぼし召すあひだ」〈虎寛本狂言・唐相撲〉。②しもじもの者の履き物。わら草履。「馬にも乗らず——を履き、弓杖（ゆゑん）を

突いて」〈平家・九・二度之懸〉。「ゲゲ [Guégué] すなわち、ジャウリ」〈日葡辞書〉

した・じた【下下】『名』身分の低い者。一般の人。庶民。また、部下の人々。召使い。「しもじも」「しもつかた」とも。「うへうへのめでたければ、——まで喜うで、めでたい折柄でござりまらす」〈虎清本狂言・鈍根草〉。「夜明けての御詮議、——の申すは」〈浮・西鶴諸国はなし・三〉。「シタジタ [Xitjiani] 従属する者、または、下位の者」〈日葡辞書』『角川』には、「げげ」、「じたじた」、「しもじも」の項目が立っている。

げげ【下下】『名』①下の下。「下々も下々下々の下国の涼しさよ」〔七番日記〕②身分の卑しいもの。「げげといふはきものは、いやしきものなれば、下々の音なるべし」〔嬉遊笑覧・二中〕③藁（わ）や藺（あ）などで編んだ草履。『七十一番歌合・上』に「とがむべき人もあらじなゐげゝはき雪井の月をのぼりてやみん：衣かつき、御所持などは中々ゐげゝはきて恐なきにこそ。草履作の身のほとしらず」とあり、しもじもの者の履物ということになっていたらしい。『貞丈雑記・八』には「げゝと云はわら草履の事也：女はゐげゝをはく也、緒太（とろ）をば男はく也」とする。「Guéguéじやうり」〔日ボ〕、「馬にもものらずげゝをはき」〔平家・九・二度之懸〕「御沓役げゝを持参、供奉の人も座せらるゝ所

に之を置く」〔殿中以下年中行事〕

したじた【下下】名「しもじも」とも。『俚言集覽』に「下々

訓したぐとも、しもぐともいへり」とある。①身分

の低い人々。治者の位置から見て被治者、武士から見て庶民。「まことに天下おさまりたる御代なれば、したぐまでにぎやかさ、申もおろかな事じや」〔狂言・猿座頭〕「世

ざかりや上したしたも花の春」〔六日の菖蒲・上〕②配下

の人々。奉公人。召使。しもべ。「秀次をはじめたてまつり、

三十よ人のうばう（＝女房）たちをはじめとして、御したぐまで、足をはかりにかけまはり」〔けいせい手管三

味線・二・二〕「舅の機嫌のよい様に、声をかけてあゐしらい、下々召使の者共にも夫々仕事を申付」〔平洲失生諸民

え教諭書取〕

しもじも【下下】名 地位や身分の低い者。下層階級の者。

公家・武家などに対する一般庶民。また、それぞれの家にあって召使にもいう。「したじた」とも。「あの下々の者の

申事が、何のやくに立物で御さる。いかに下々じやと申ても」〔虎寛本狂言・闇罪人〕「どこぞで家持に成まひもので

もない。其時は随分下々迄に云付て」〔教訓雑長持・五〕

『室町』には、「げげ」、「したじた」、「しもじも」の項目が立項されている。

げげ【下下】①序列、等級の最下位。下の下。「ゲノゲ、ま

たは、ゲゲ」〔大文典〕「抑去年夏以来者、下々成下無

是非一次第候」〔後編薩藩旧記雑録天正十一、二、片書北〕②身分

の低い者ども。しもじも。「Guegue（ゲゲ）。「公家」以外の

すべての者」〔日葡辞書〕③④のはく履物であったところから、

藁草履をいう。「芥々ケケ草履事」〔静嘉堂運歩〕「芥々ゲゲ草履也芥下トモ

（猪無野色葉）「Guegue（ゲゲ）。「草履」に同じ。草鞋に

似た藁製の履物。婦人語。「ゲゲヲハク」。この藁製の草履

をはく」〔日葡〕「すゝはきは十二月廿日古よりかはらず御

入候。：上段もいづくもけゝをはき申。：けゝも一家衆の

分は御堂衆被一申付一候き。御堂衆坊主衆の分は自身自身

こしらへはきて被一出候」〔本願寺作法之次第〕「太子はげゝ

しゆじやうのくつをはき、こんでいこまにのり給ひて」〔短

編＝釈迦の本地中）

したじた【下下】主君に対して、その統率・支配のもとにあ

る人びと、また、そのような低い階級の者ども、をいう。

「しもじも」とも。「Kajia（シタジタ）。配下、すなわち、

部下。また、下に。例、「下下ニナル」。下に、すなわち、

下位になる」〔日葡〕「誠にめでたい御代なれば、うへうへの事は申におよばず、したしたまでも、あなたのふるまひのこなたのふるまひのと申て、おびたゝしひことで御さる」〔虎明狂＝末広がり〕「シタジタハ主人ノ好キコノムコトヲ

学ブモノヂヤ」〔天草金句〕「その雑物に、小判金子百枚お

取り換いて進じまるするほどに、是非とも御異議なく、したしたにも遣わしらるやうにこそさしられ」(捷解八)

しもしも「下下」↓したじた。「欲心フカウシテ、年貢フシ
ンヲユエモナウマシテルホドニ、下々ワザワイガデクル
ゾ」(玉塵上)「御もつのをきどころ、しもしも、御ともし
ゆのおりどころ、それそれあまたこしらへをかれたり」(大
聞さま軍記のうち)

当該の「下々」に関わる、先行の見解から得られる「下々」の
意味の「身分の低い、下々の者」は、『日国』では、「げげ」の語
義の①、「したじた」の語義の①、「しもしも」の語義、『小学館』
では、「げげ」の語義の①、「したじた」の語義、『角川』では、「げ
げ」の語義の②、「したじた」の語義の①、「しもしも」の語義、『室
町』では、「げげ」の語義の②、「したじた」の語義、「しもしも」
の語義に、それぞれ該当する。その限りに於いて、当該の「下々」は、
「げげ」、「したじた」、「しもしも」の、いずれの可能性も有する
ことになる。しかし、そもそも個々の字典の掲げるこれらの項目
の語義自体が妥当であるとは限らない。例えば、『室町』では、「げ
げ」の語義の②の用例として、『日葡辞書』(1603年刊)の「げ
げ」の項目を唯一挙げているが、そこで引用されている、ポルト
ガル語訳部分に対する日本語訳によれば、「公家」以外のすべて
の者」となっている以上、②の語義の「身分の低い者ども。しも
しも」というのは、かなり大まかな語義設定であり、用例を尊重

した語義とはいいがたい。

三・三 当該の「下々」の吟味

当該の「下々」を吟味するにあたり、『きのふはけふの物語』
の成立に極めて近い時期に刊行された『日葡辞書』の記述を突き
合わせながら進めることにする。

当該の「下々」は、「はうちやくなるものども」に対しての、「御
つねたち」の、「是はたいりさまとて下々のたやすくまいる所
にてはないそはやくいつかたへもまいれ」という発話中の表現
である。たしかに、この「下々」を「身分の低い、下々の者」の
意味で解しても、それなりに文意は通るが、発話の主体が「御つ
ほね」であることからすれば、彼ら「はうちやくなるものども」
が皇居に参入する資格があるか否かを「御つほねたち」は問題に
していると考えるべきである。皇居に入る資格とは、朝廷に直接
仕えているということにはかならない。御つほねたちにとつて、
「はうちやくなるものども」は、明らかに朝廷には仕えていない、
参入を拒否すべき存在のわけである。

では、朝廷に仕えている人は、どのような人たちなのか。『日
葡辞書』で、「朝廷に仕える人」を意味する、「みやびと(宮人)」「
きゆうじん(宮人)」の項目を引くと次のようにある。

Miyabito, Cuguetachi. Nobres, ou fidalgos que servem ao

Dairi no pago. (訳: 宮人。すなわち、公家達。宮廷において内裏に仕える高貴な人、あるいは貴族。)(本篇)

Quijn. Miyabito. Gente nobre do paso como Cigueus. (訳: 宮人。宮人。公家たちのような、宮廷にいる高貴な人々。)(本篇) これらの項目では、見出し語を「公家(達)」で言い換えたり、代表的な存在として、「公家」を挙げている。そこで、「くげ(公家)」の項目を引くと、

Cigue. Familias dos Cigueus que serviu ao Dairi. (訳: 公家。内裏に仕える公家たちの一門。)(本篇)

とあって、「内裏に仕える」人たちと規定しており、これらの項目の説明には一貫性があるから、〈朝廷に仕える人〉は当時一般には「公家」と呼ばれていたことは疑いない。

したがって、『日葡辞書』『補遺篇』の「げげ(下々)」の項目に *Cuegue. Toda a gente a fora os Cigueus.* (訳: 下々。公家たちを除いたあらゆる人々。)

とあるのは、朝廷に仕えていない人を、朝廷に仕える人と区別するために、「げげ(下々)」という語が生じた、あるいは、「げげ」にそういう意義が生じたと考えられる。

『日葡辞書』には、「したじた(下々)」の項目があるが、*Xitajita. Subordenados, ou inferiores. ¶ Ité. De baixo. Vt. Xitajitani naru. Ficar de baixo, ou inferior.* (訳: 下々。従者、または、配下。『また、下位に。例、下々ニナル。』

下位になる、あるいは配下になる。)(本篇)

と、『日葡辞書』の「げげ」の項目で示されている語義は見当らないし、他の文献からも確認できていない。

ゆえに、当該の「下々」は、「げげ」であり、文脈的には〈公家衆ではない者〉というような意味になると考えられる。

四 おわりに

以上、大東急記念文庫本『きのふはけふの物語』における「下々」の、語としての特定をめぐって、諸本の表記、先行の見解、主要な国語大辞典・古語大辞典の関連項目の検討、当該「下々」の『日葡辞書』との突き合わせによる吟味の結果、「下々」は、「げげ」であり、文脈的には〈公家衆ではない者〉というような意味になると考えられることを述べた。「げげ」の、このような公家用語ともいうべき、「はうちやくなものと」にとつての難解さが、「御つほねたち」との対話をいっそう困難にしたに違いない。

なお補足すれば、『日国』の「げげ」の項目に関して、語義の①の用例として、『名語記』を挙げているが、これは語義の③の語源を推測する過程で述べている箇所、必ずしも「身分の低い人たち」の意として「下々」という語があることを前提としていないので、挙例には適さない。また、『日葡辞書』から「Cuegue(ゲゲ)〈訳〉公卿以外のすべての人々」と引用しているが、「公卿」

は「公家」の誤りであることになる。

注1 日本古典文学大系『江戸笑話集』二九ページ。

へうるしざき まさと／本学教授

第九十九号・一〇〇号 合併号 目次

二〇一九年三月

天竺僧菩提僊那の「呪術」に関する覚書	水口幹記
讃岐の崇徳院をめぐる西行和歌の位相とその表現性	平田英夫
上田秋成の『源氏物語』卷名和歌	山本綏子
漱石の日露戦争	関谷博
『琴のそら音』と『趣味の遺伝』	関谷博
戦争の記憶／記憶の戦争	
―奥泉光「石の来歴」論 中編	
(構造主義批評から精神分析批評へ)	菅本康之
唐詩中の使動表現小考(その一)	名畑嘉則
語学書系キリシタン資料における恋愛表現をめぐって	漆崎正人
―「こひ」系語彙の場合―	
風変わりな少女「小公女」の変遷	
―若松賤子から伊藤整まで―	種田和加子
文章論序説(二)	
―言語表現における「成り下がり」について―	楊妻祐樹
二〇一七年度 日本語・日本文学科 卒業研究題目一覧	
藤女子大学国文学雑誌 総目次(第五十号～九十八号)	

一冊 五〇〇円